

第2章 春の選抜大会

新チームが始動し、初めての試合が行われる春の全国選抜大会の日がやってきた。丸井のひきつる墨谷ナインは、前年度の優勝校という名誉をひっさげて、春の選抜にいどんだのである。

2・1 選抜大会開会式

春の選抜大会開会式当日、控え室では全国から集まった強豪たちが開会式を待っていた。墨谷二中の初戦の相手は広島港南中だった。

墨谷二中は出場校の控え室となっている球場のいつかくで着がえをはじめていた。

近藤「さすが三十二校もあつまるとすごい人数やなあ。」

丸井「三十二校といってもな全国各地から選ばれたチームなんだぞ。」

近藤「はい。」

会場には選抜出場校がところせましとひしめきあっていた。

竹田「ちよつとキャプテン、墨谷二中ですよ。」

内田「ちよつとあいさつをしてくるけえの。」

墨谷二中の初戦の対戦校の港南中キャプテン内田が墨谷二中のもとに近づいてきた。

内田「あのう丸井さんですね。」

丸井「え…なにか？」

内田「ぼくは港南でキャプテンをつとめてる内田です。」

丸井「港南…あ…なんだ、きょううちとあたるんじゃないか！ よろしく、よろしく。で…きみ、どこを守ってんだい？」

内田「キャッチャーですけど。」

丸井「ふん。ま、お互いにがんばろうや。」

内田「じゃ、よろしく。」

港南中キャプテン内田はチームメイトのいる場所に戻っていった。

竹田「おどろいたのう、キャプテンのポジションも知らんのかよ。」

多賀「うちもなめられたもんじゃな。」

内田「ふふふ。よっぽど自信があるんじゃないろっ。」

港南中学の内田は墨谷二中が自分たちのことを何も知らないことに気がついた。

2・2 島田の鉄拳

対戦校港南中学の試合前の練習をみながら墨谷ベンチでは、キャプテン丸井がナインに最後の注意を与えていた。

丸井「いいか、おまえたちは知らんかもしれんが、港南は全国大会にもでたことがあつて、広島じゃいちおう名のおつていいる学校らしい。しめてかかるんだぞ。」

近藤「しかし、そろいもそろつてまっ黒やなあ！」

丸井「それだけ練習量がおおいってことだ。」

近藤「あ…なるほど。」

丸井「それから近藤。おまえは試合なれするためにライトにはいれ。」

近藤「ラ…ライトでつか。試合になれるんやつたら、ここでもなれると思つんやけど……」

丸井「心配するな、おまえんここには打たせねえようにするから。」

近藤「いや、そついうわけやあらへんねん。なんていうたらええか……」

丸井「どうしたんだよ？」

近藤「えーと……。ライト守つてんのを知ってる人に見られたらかつちわりいねん。」

丸井「なに？」

近藤の言葉を聞き丸井はおもわず立ち上がった。近くにいたイガラシ、加藤が丸井を制止した。近藤は何が起きたかわからず、キャプテン丸井を見た。その時だった。

島田「こ、こんどうっ！」

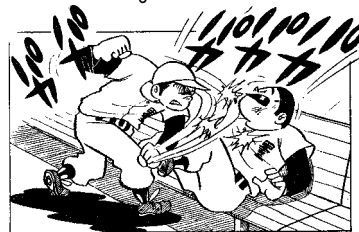
島田が近藤に向かって殴りかかった。

近藤「い…いきなり、なにすんねん。」

島田の怒りの鉄拳が近藤を襲つた。一発、二発…。近藤は倒れ込んでしまう。

近藤の顔には鼻血が流れた。

近藤「い…いったい、なんやねん。だ…、だれか止めてえな！」



しかし、誰も島田を止めようとしなかった。島田は気がすんだのか、ベンチの隅に座りこんだ。島田がベンチにすわつて、ようやく近藤も自分のしたことがわかった。

近藤「島田さんがライトやつてるといふのに、どうも失礼なこと言つてしまつて、すんまへん。」

丸井「ひっこんでろ、この。」

島田に対して謝る近藤をキャプテン丸井が引き離れた。しかし試合まえだといふのに墨谷ベンチは最悪のムードになってしまった。

丸井「くそ…なんてこつたい。」

2・3 試合開始

試合は墨谷二中の先行で開始された。

丸井「いいか、みんな。まず、よくタマを見てあわせていけ。」

円陣を組んだナインに向かって丸井は試合前の注意を与えた。一番はファースト加藤。港南中のピッチャーの初球をおもいつきりよくたたいた。打球はライトスタンドに運ぶもおしくもファールとなる。おもわず港南キャプテン内田はタイムをとつてマウンドに向かった。

内田「どうしたんじゃ、サインが見えんのか？」

野口「い…いえ。」

内田「おちつけえ。」

野口「はい。」

キャッチャーであり港南中のキャプテンでもある内田がピッチャー野口に対しておちつくように声をかけるが、野口の投じた二球目、三球目と大きくはずれるボール球となった。たまらず、もう一度タイムを取ってマウンドに向かった。

内田「何を力どるんじゃ！ ええかやつらは青葉から十点も取ったチームなんじゃ。打たれてもととなんじゃ。」

内田はピッチャーの野口に対して声をかけるが、野口は全国大会の緊張感から本来の表情にはほど遠い状態であった。

内田「よっしゃ。ええからどまん中投げろ……！」

野口「は……はあ？」

内田「心配するな。今のイガラシならなんとかかえせる。」

野口「わ……わかりました。」

四球目、加藤はライト前ヒットを打った。一番ショート高木も三塁線を抜くヒットを打つ。墨谷二中は初回ノーアウト一塁、三塁のチャンスをもくえた。三番はセカンドのキャプテン丸井。打球にさからわずにセンター打った。三塁ランナー加藤はタッチアップをねらう。加藤は余裕でセーフだと思ったが、港南中センター竹田の好返球にあいホーム寸前でタッチアウトとなってしまう。

久保「す……すげえ肩だ……。」

小室「こりゃ、なめてかかるとえらいことになるぞ。」

ツーアウト一塁。次は四番ピッチャーイガラシであった。イガラシは港南中野口の投じた真ん中の速球をジャストミートし、ボールをレフトスタンドに運んだ。ツーランホームランとなり。墨谷二中が先制点を奪った。

野口「す……すみません。」

内田「おまえは、おれのサインどおりに投げりやえんじゃ。ええか、この回はぜんぶまんなかだぞ。そうすれば墨谷二中は油断する。墨谷二中はうちのことなんもしらんじゃけん。」

野口「は……はい。」

五番キャッチャー小室もセンターに抜けるかという当たりだったが、セカンド多賀のファインプレーでチェンジとなった。

丸井「さっきのセンターの返球といい、やっぱり選抜に選ばれただけあってちょっとがうな。」

イガラシ「こいつは、しめてかかったほうがいいですよ。」

丸井「さあ、がっちりいこうぜ。」

「オウ！」

丸井の声にナインは声をだし、守備にちつていった。港南中は円陣を組みキャプテン内田がナインに注意を与えていた。

内田「ええか、やつのインシュートだけは、ぜったいに手を出すな。」

港南中先頭バッター多賀は初球の直球を見のがし、二球目のカーブをファールした。三球目のイガラシ得意のインシュートを打ちピッチャーフライとなってアウトとなった。

内田「どうしたんじゃ！」

多賀「おいこまれたけえ、つい手がでてしもつたんです。」

内田「おちついて、みていこうぜ！」

二番打者はセカンドゴロ、三番打者はセンターライナーとなってこの回は三者凡退で終わった。

丸井「なまいきに、けっこうあててくるじゃんか。」

イガラシ「それどころか、こりゃ、ひよっとするとひどいめにあいますよ。」

丸井「おい、へんなこというな。」

竹田「くそつたれ。三者凡退かあ。」

内田「あせるな、あせるな。今につかまる。」

初球のホームラン性の大ファールに萎縮した港南のピッチャーは二点を先取されたことであつて落ちつきをとりもどしたのか、キャッチャーの好リードにこたえて、たくみなピッチングで墨谷ナインをかわした。いっぽうイガラシはしだいにくいさがってくる港南を全力投球でふりきった。試合は2対0のまますすんでいったが、しかし回をおうことにイガラシのおとろえはかくせなかった。

2・4 近藤の失策

回は八回裏。港南の攻撃は打順よくトツプバッターから始まった。

「カキーン！」

先頭バッターが三遊間を抜けるヒットを打った。

内田「さあ、イガラシをつかまえたぞ！ しかし、いちおうインシュートはすて

ていけ。」

竹田「まかせといってください。」

「カーン！」

二番打者はライトにあがる平凡なフライとなった。イガラシは打たれた瞬間ライトには一年生近藤が守っていることに気がついた。

近藤「オーライ、オーライ。」

ライト近藤はなんでもないフライを後逸してしまう。センター久保がバックアップした。ノーアウト二塁、三塁のピンチをむかえた。

港南中C「お…おいライトアナなんじゃないんか？」

内田「ライトにながしてみろ。」

港南中B「はい。」

セカンド丸井と、センター久保がライトよりポジションを変え近藤を援護した。しかし、それにもかかわらず港南中三番打者は球威の衰えたイガラシのタマをライトに流した。

丸井「オーライ、オーライ。」

丸井が取れそうな小飛球だったが、ライト近藤が突っ込んできて丸井と衝突したためボールはグラウンドに落ちた。二人のランナーが返って2対2の同点となった。打ったランナーは三塁に進んだ。ノーアウト三塁、墨谷二中のピンチが続いた。



2・5 ピッチャー近藤

丸井が近藤をマウンドに呼んだ。

イガラシ「近藤、たのむぞ。」

近藤「はい。」

丸井「どうしたんだ？」

近藤「す…すんまへん…。ワイのためにこんなになっちゃって。ライトというボ

ジションがこんなに大変だということを初めて知りました。」

丸井「それは、島田にいうセリフだ。それよりおまえは全力投球しておさえるこ

とだ。ベンチにすわっている島田もそれをのぞんでるだろう。」

近藤「はい。」

ピッチャーイガラシから近藤に変わった。味方応援席からもヤジが飛んだ。

「島田を出せ。」

「墨谷二中の名誉をきずつけるな。」

丸井「うるせえな、この大事なときに。」

近藤「まあまあワイが、タマ投げたらしずかになるさかい。」

丸井「それもそつだな。」

ピッチャー近藤が投球練習で投じた一球目を見た港南中ベンチ、墨谷二中応援団、ともにそのタマのスピードに驚き、球場は一瞬静まりかえった。

多賀「は…はいのう。」

内田「なあに、やつの守備はメチャメチャだ。やつの所にただはじきかえせばいいんだ。」

竹田「なるほど！」

港南中バッターは四番キャプテン内田だった。初球を見送ってバットを短く持ちかえるも二球目を空振りした。

近藤「これが、とどめやーっ。」

「ストライク、バッターアウト！」

審判の声が響いた。

丸井「その調子だ。近藤！」

キャプテン内田は次の打者にアドバイスをした。

内田「ええか、タマにあてることだけに専念しろ。とてもおれたちにはじきかえせる相手じゃないぞ。わかったな。」

港南中五番打者はバットを短く持って初球を打ちにいくがバックネットに当たるファールとなる。そして次のボールはボテボテのサードゴロ。イガラシがなんなくこのボールをひろってファーストに送球した。

「アウト！」

しかし近藤は一塁に走ったバッターをマジマジと見ていた。

丸井「どうかしたのか？」

近藤「ワイのタマを打つなんて…、すごいバッターやなあと思って…」

丸井「あのね、港南ってのはね、選抜に選ばれたチームなの、わかる？ わかる？」

近藤「は…はあ。」

港南中内田は次の打者にアドバイスした。

内田「ええか、バントでピッチャー前にころがせ。やつ守備のまずさをつくよ
り手はない！」

バッターは指示どおりにピッチャー前にバントした。

近藤「やや、なんちゃってさ！　へへっ。ワイはバントは…練習したんや。」

先ほどのライト守備とちがって、ゴロをさばく近藤はややぎこちないながらもタマをさばき
ファーストに送球した。

「アウト！」

三塁走者残塁となって、墨谷二中はかくもピンチをしのいだ。

内田「ますいのう、これじゃ手のうちようがない……。」

2・6 絶体絶命

回は九回、得点は2対2同点で墨谷二中最後の攻撃である。六番センター久保から始まる
が、墨谷二中を調べつくした港南のバッテリーを下位打線ではとうてい打ちくずすことはでき
なかった。

「バッターアウト。チェンジ。」

審判の音が響いた。

丸井「くそっ、むーっ。こっとなったら延長戦にもちこむしかない。たのむぞ近藤。」
近藤「まかせといてえな！」

先頭打者野口は投球練習をしている近藤を見ていた。

野口「どうでしょう。」

内田「なんとしてもあてるだけだ！」

野口「はいっ。」

先頭打者野口は初球から打ってでたが、打球は小フライとなった。

丸井「キャッチャー。」

小室「オーライ。」

その時だった。ピッチャー近藤がキャッチャー小室を妨害するかのよう前進してきてこの
フライを落としてしまう。

丸井「キャッチャーって言ったのが聞こえねえのか。」

近藤「す…すんまへん。」

丸井「おまえはゴロいがいはずべておれたちにまかせりゃいいんだ！　でしやば
りやがって。」

近藤「は…はい。」

近藤は気を取り直して次の打者に向かった。だがその一球目…。

野口「ふ、ふりかぶった。」

一塁ランナー野口はふりかぶったのを見て、二塁に盗塁した。近藤は思わず二塁にタマを送球した。

「ボーク！」

審判の音が響き、楽々一塁ランナー野口はセーフとなった。

丸井「て……ためえ、ランナーがいるのがわかんねえのかっ。」

近藤「そないことあらへん。」

丸井「……。」

イガラシ「すみません……。バントの守備練習でいっぱいセツトポジションまでまわらなかつたんです。」

丸井「えーっ。じゃうだんじゃねえ、草野球じゃねえんだぞ。じゃあみすみすランナーを三塁までやつちまうってことじゃねえか。」

近藤「キャプテンって心配性やな、ワイの腕を信頼してえな！」

丸井「信頼しろっていつてもスクイズされたらどうするんだ！」

近藤「スクイズってなんやねん。」

マウンドに集まった墨谷ナインは近藤がスクイズを知らないことに驚いた。

イガラシ「まあ、いまさらここでくさつてもしょうがないでしょ。みんなでなんとかカバーするしかありませんよ。」

丸井「……。」

近藤の打者に投げたタマはストライク。しかし二塁ランナー野口はこの間に三塁に進んだ。ノアウト三塁。墨谷二中絶体絶命のピンチである。

近藤の二球目を打者はバントするもバックネットに当たるファールとなった。次のボールに対してもスクイズバントをしたが、ボールは三塁線をそれファール。三振となってしまった。ワンアウト三塁。まだまだ墨谷二中のピンチは続いた。

港南中C「どうします？」

内田「む……相手が相手だけにおまえのバントじゃな、もし空振りでもすると三塁ランナーをころしてしまふ。よしヒッティングにでろ。」

港南中C「はいっ。」

バッターは初球から積極的に打っていった。そしてかろうじてバットにあてたが、ボテボテのファーストゴロとなった。ファースト加藤は前進してなんなくこの球を捕った。サードランナーを牽制しベースカバーに入った丸井にボールを投げようとしたとき、ピッチャー近藤が一瞬誰もいなくなったファーストに向かって走り出した。

加藤「どけ、近藤！」

ファーストベース上でセカンド丸井とピッチャー近藤が交錯し、折りかさなって倒れた。それを見たサードランナー野口はホームに走り出した。

近藤「ま……丸井さん、すんまへん……。」

丸井「くーっ。」

丸井は近藤を払いのけるとボールをひろい、ホームに向かって投げた。ホームベース上でのクロスプレーとなった。

「セーフ！」

審判の音が響いた。丸井はその場にすわりこんでしまった。



近藤「か… かんになしてな、キャプテン……。」
 丸井「さわるなつ。てめえのおかげで負けたんだぞ、チキ
 ショー！ てめえさえ、でしゃばらなかつたらこん
 なことにはならなかつたんだ。」
 加藤「キャプテン、なにもこんな所で……。」
 丸井「はなせよ！」

丸井は怒りをコントロールできずベンチに帰って行った。応援席から「やだねえ、いくら負けたにしろ、なんだいあの態度は……」と叱責しせきの聲が聞こえた。

丸井「今、だれが言った。おりてこいよ！」

小室「ままま、なにも、そう興奮しなくても……。」

イガラシ「よしなさいよ、みつともない。」

丸井「てやんでえ！ こんなことになったのも、みんな近藤のせいじゃないか。」

丸井はナインに抱えられながらベンチに入っていった。

丸井「はなせてんだよ、このやろつ。」

2・7 帰校中のバスの中で…

敗戦のショックをひきずりながら墨谷ナインは学校に帰校しようとしていた。

島田「すわれよ近藤。疲れただろう。」

丸井「よけいなことをするな。そんなやろつがすわるガラかってんだ。ヘマばかりしやがつてよ。」

イガラシ「いいかげんしなさいよ、キャプテン。さつきから近藤のせいにはばかりしてるけど、おれたちにも責任があるんじゃないですか？」

丸井「お…、おれたちが何をしたってんだよ！」

イガラシ「どだい相手がどんなチームかも調べもしないで、選抜にのぞんだことじたいすでに敗因いしんじゃないんですか。今日の試合に当たって、相手ピッチャーが萎縮いしゆくしたから二点はとれたものの、それ以後一点もはいらなかったじゃないですか。」

丸井「近藤のエラーさえなけりやその二点で勝ってたんだ。」

イガラシ「いや… たえ勝ったとしても、すぐつぶされました。たしかにおれたちは名門青葉に勝って優勝しました。しかしそれには谷口さんという青葉をよく知った人がいたし、青葉に対する特訓までしたじゃないですか。ようするにたった一つの目標に努力すればよかったんですよ。しかし選抜ともなるとあらゆるチームに勝ちぬいていかなければならないんです。おれたち全国大会つてものを考えなおさなくちゃいけないんじゃないんですか。」

丸井「……。」

イガラシの言葉を聞き突然に丸井は立ちあがった。

加藤「どうしたんですか、キャプテン。」

丸井「おまえたち、先に帰っててくれ。」

丸井はナインには何も言わずに一人バスを降りた。取りのこされたナインは思い思いの気持ちで言葉を吐いた。

加藤「なあ、イガラシ。こういうときこそナインを勇気づけてひっぱっていくのがキャプテンのつとめじゃねえのか？」

イガラシ「あの人にそこまでのぞむのはムリだよ。」

加藤「そのキャプテンがふてくされちゃってよ。」

小室「ぶつ。」

加藤「おれはとうていいついていく気はないね。」

小室「まったく。」

イガラシ「よせよ、グチを言っただけみじめになるだけだ。」

小室「それより、いつもやる試合後のミーティングはどうするんだ？」

高木「キャプテンがいらないんじゃないしょうがねえよ。」

島田「このまま解散するか。」

加藤「まあまてよ、キャプテンが帰ってくるまでおれたちだけでもミーティングしようじゃないか。」

小室「そつだな。…だけど…みじめだね…。」

2・8 ひとりぼっちの丸井

バスを降りた丸井はイガラシに言われたことを思い出していた。「相手がどんなチームかも調べもしないで、選抜にのぞんだことじたいすでに敗因じゃないんですか。」

丸井「くそつ、キャプテンのおれが人前でわめきちらし、近藤一人のせいにしやがつて！ おれはしょせんキャプテンなんかやるガラじゃねえんだ…。なんてダメな男だ…。」

丸井はひとりになってようやく冷静になることができた。近藤ひとりに試合の責任をおしつけようとしたこと、試合後も負けたたはらいせをみんなにあたりちらしたこと…。そういえば相手チームのキャプテンは試合中味方ナインにいろいろ声をかけていた…。谷口さんだったらこんな時どうするんだろ…。いろいろなことが頭をよぎっていった。

丸井「そつだ！」

丸井は反対側車線に行き、今きた方向とは逆のバスに乗った。丸井の行った先は先ほど試合が行われた球場だった。球場内で見学をしているチームを探していた。

丸井「あのう、墨谷の丸井ですが、キャプテンいますか？」

生徒A「ちよつとまつてください。」

太田「キャプテンの太田です。さっきの試合はおしかったですね。で、なにか？」

丸井「じつは練習試合を申し込みにきたんです。」

太田「はあ？ いいですね。でも場所が…。」

丸井「ウチのグラウンドでもいいし、こちらからおたくのほうに出向いてもけっこうです。」

太田「出向くつて、北海道までいらしゃれるんですか？」

丸井「ホ…北海道だったんですか。それじゃムリだ。ど…どうも失礼。」

丸井は照れ笑いを浮かべてその場を後にした。北海道から選抜にのぞんだチームのナインからは笑い声がもれた。

生徒A「なんだい、あのキャプテンはおもしろい人だね。ウチがどこの出身かも知らないでさ。」

太田「笑いごつちやないぞ。」

生徒B「はあ…。」

太田「普通、試合に負けりや、二、三日はがつくりくるもんだ。それをたつた今試合に敗れたつていうのに、すぐ練習試合を申し込むなんてちよつとできることじゃない。」

生徒B「そついや、そつだった。」

生徒A「うむ…。」

太田「おれたちも、あなりたいものだ。」

丸井は球場内をテクテクと歩き、練習試合ができそうなチームを探した。



丸井「あ…これもダメだ。九州じゃな…。くそう、なんとしても次の全国大会で優勝するためには、あらゆるチームに通用するように、練習試合ができる学校をみつけないと。」

丸井は球場内をつぶさに歩いてまわった。

2・9 試合後のミーティング

丸井は帰りのバスの中で今日交渉した相手チームを確認していた。

丸井「えーと…。選抜から九校と、見学に来ていた学校が二十七校、しめて三十六校か…。みんなたまげるだろうな。」

丸井が部室のドアを開けた。

丸井「よう、待たせたな。なんだ、ミーティングを始めていたのか。ああくたびれた。」

加藤「よかつたら、このままつづけさせてもらっていいですか。」

丸井「ちよつとまで、その前に大事な知らせがあるんだがな。」

加藤「われわれも、大事な事を話しあってるんですが。」

丸井「な…なんだい、その大事な事って？」

加藤「大変言いにくいことなんです…。丸井さんがキャプテンとして不適格ということが多数決で決まりました。欠席裁判のようになってしまいました。丸井さんが帰ってこなかったのです。」

丸井は一瞬驚くも、今日のことを問われたらしかたがないなと感じた。

丸井「…。だろうな。たしかにキャプテンとしては適格じゃない。おれってカーッとなって頭に血がのぼると何もわからなくなっちゃったんだからな。で…誰に決まったんだい？」

加藤「それを、これから決めるところなんです。」

丸井「じゃあ、おれがいたらやりづらいだろうから帰る。」

丸井は帰ろうと部室のドアに向かって歩き始めた。

丸井「あ…その前に頼みがあるんだがな！ 実は帰りがけにバスの中でイガラシに言われてなるほどと思ってよ。あれからひきかえして練習試合を決めてきちゃったんだがな、おしつけるようで悪いんだが、ムリに頼んだところもあるんでよ、キャプテンになる者はなんとかそれを実行してほしいんだが…。そうしてくんねえとおれの立場なくなっちゃうんだよ。わかるだろ。ここにスケジュールが書いてある。じゃ頼むな。」

丸井がドアを開け部室から出て行った。取りのこされたナインは先ほどの話し合いの続きをおこなった。

加藤「じゃあ、キャプテンを誰にするかなんですが…。」

イガラシ「その前にこの中にキャプテンになれるやつがいるのか、話しあったほうがいいんじゃないのか？」

島田「し…しかし、どんなときにも冷静であるべきキャプテンがああ感情にはしる人でいいのかな。」

小室「うーむ…。」

イガラシ「おれたちは丸井さんのことをどうのこつこのこつたがよ、チームのこれからのことを考えたやつがおれたちの中にいたか？」

加藤「そーいや、おれたちがこうしているあいだに丸井さんは走りまわっていたんだな。」

ナインは静まりかえった。そして長い沈黙が続いた。

加藤「やつぱり、キャプテンは丸井さんしかないのかな……。」
遠藤「だろうな。」
加藤「よし、もう一度みんなで丸井さんに頼みにいこう！」
島田「うむ。」

墨谷ナインは全員で丸井の後を追いかけた。

「丸井さん。」

イガラシ「キャプテンを続けてください。」

丸井「ええっ、おれにキャプテン続けるだつて。だ、だけど……。」
イガラシ「お願いしますよ。もう一度キャプテン引きつけてください。」

丸井「てめえら、あげたりさげたり勝手じよう。」

「お願いしまゝす。」

丸井「ま、考えとくよ。」

